

理想自己の観点からみた大学生の自己形成に関する研究¹⁾

山 田 剛 史

神戸大学大学院総合人間科学研究科

本研究では、現代大学生の自己形成を理想自己の観点から捉えることを目標とし、質問紙により尺度評定と自由記述とを絡めた検討を行った。本研究では、「自己形成」を“理想自己実現に向かっていこうとする意欲と実際に向かっているという行為の総体（理想自己志向性）”として規定し、得点化した。この得点と適応感を測定するための自尊感情得点との組み合わせから自己形成の8つのパターンを作成し、個人が重要とする理想自己に対する6つの意味づけのパターンと実現に向けての具体的方略およびその希求の相違についての検討を行った。その結果、理想自己志向性としての自己形成の高さには、意味づけにおける自己/他者の違い、方略の有無ならびに実行率が関係していることが示された。

キーワード：大学生，自己形成，理想自己志向性，意味づけ，具体的方略

問題と目的

理想自己の2側面：適応的側面と自己形成的側面

理想自己 (ideal self) は、Rogers (1959) により「個人が非常にそうありたいと望んでおり、それに最も高い価値をおいている自己概念」と概念的に取り上げられて以来、数多くの研究が蓄積されてきた。その主要な一連の研究として、「理想自己と現実自己とのズレ（不一致）」を問題とした研究があげられる。それら不一致を問題とした研究は概して適応の指標（自尊感情や自己受容など）として機能していることを明らかにしようとするものであったが、必ずしも一貫した結果が得られていなかった。その点に関して、Hoge & McCarthy (1983) は、ズレを適応の指標

として扱うことの妥当性の問題ではなく、測定方法上の問題であることを指摘している。1980年代半ばより、Higgins (1987) は理想と現実の不一致と特定の感情との結びつきに関する理論 (Self-discrepancy theory) を提唱し、Markus & Nurius (1986) やOgilvie (1987)、桑原 (1986) は「なりたくない」という負の理想自己をも含め概念拡大を行い、その意義を明らかにしている。1990年代に入り、従来の測定方法上の問題点を解消すべく方法論の転換期を迎えることとなる。従来の調査者によって集められた項目に反応させる方法（法則定立的方法）に対して、被調査者本人によって表出された項目に反応を求める方法（個性記述的方法）が実証的ズレ研究に取り入れられるようになったのである。この意義は、Moretti & Higgins (1990) や遠藤 (1992a, 1992b) らによっても示唆されている。このように理想自己に関する研究は主としてズレをベースとし、各種適応指標との関連を扱うものであり、個性記述的方法の

1) 本研究の一部は日本青年心理学会第10回大会 (2002年) において発表されました。本論文は大阪教育大学大学院教育学研究科に提出した修士論文 (2002年度) の一部を再分析・再加筆したものです。

導入により、より精緻化されるに至った。

そうしたズレの持つ適応的側面に関する研究が行われる一方、ズレの持つ自己形成的側面に焦点を当てている研究もみられるようになってきた。つまり、なりたい自己像からのズレの大きさは、高い現実検討能力を有し、自己を批判的に見つめることができるために設定されるものであり、自分をもっと高めたいという“成熟へのしるし”としても機能しているのではないかと、いうものである。たとえば、水間(1998)は「自己形成意識」、安達・菅宮(2000)は「自己成長意欲」としてそれぞれ概念化し、ズレの持つ自己形成的側面について検討を行っている(その他にも山田, 2002など)。

このように理想自己を扱った研究には、現実自己とのズレを起点とした適応的側面と自己形成的側面に関するものがある。しかし、問題点として(a)理想自己が現実自己とのズレを算出するための手段として取り上げられており、理想自己そのものへのアプローチとしての自己形成に関する視点が欠如しているということ、またそれによって個性記述的観点を導入しているものの、非常に抽象度の高い議論になってしまっているということ、(b)自己形成的側面が、(対象に)向かっていきたいとする意欲的(意志的)側面からのみ捉えられているということがあげられる。それらの問題点を踏まえ、理想自己から自己形成を包括的に捉えていく場合、(1)その理想自己が本人にとってどのような意味を持っているのかといったこと(意味づけの視点)、(2)対象に対する意欲が喚起されると、その先には実際にどういった行為(方略)が取られているのかといったこと(行為の視点)が考慮される必要がある。本人にとっての意味づけを考慮することの意義に関しては、Moretti & Higgins (1990)以降の内在的視点(梶田, 1988)による個性記述的研究や属性評定という視点を組み込んだ一連の目標研究(cf. Little, 1983; Emmons, 1986)で直接的・間接的に示さ

れている。行為の視点を考慮することに関して、人は経験によって、様々な価値や理想、自己概念をつくりあげていき、自己を形成していく(溝上, 1999)という指摘にもあるように、認識(内的・心的)世界と外的世界との関わり(経験)のなかで生きており、その意味でも単に認識世界での意欲的側面のみならず実際に外的世界に対して自分がどう向き合っているのかという行為的側面を組み入れる視点は重要であると思われる。その上で、本研究では、自己形成を“理想自己実現に向かっていこうとする意欲と実際に向かっているという行為の総体(理想自己志向性)”として位置づける²⁾。遠藤(1991)においても、従来では個人がどのような理想を持っているか、またその特質は何か、さらにその個人差がどう個人の行動の違いに結びつくかなどについて実証的な研究はなされてこなかったと指摘されている。また、これまでみてきたことから、理想自己つまり未来(厳密には過去も)に対する自己像に関する対象を取り上げる際、その表出に当たって現時点の自己概念の状態というのが重要な問題となってくる。その理由として、理想自己というものは、その性質上、現在とのズレを必然とした概念であり、そのズレが現時点における自己概念を規定している(あるいはその逆)という相互不可分離の関係にあることがあげられる。そこで、現時点での自己概念を示すものとして、特定領域にとらわれない適応指標を用いる。本研究では、これまでに適応指標を測定するものさしとして数多く利用され、自己概念の主に自己に対する感情的側面を測ることを目的としている「自尊感情」を適応指標(適応感)として用いていくこととする。

2) ただし、この定義によって示される自己形成が自己形成の全てを包括しているものではなく、あくまで自己形成の一部を構成するものだと考えている。その上で、本研究では、理想自己志向性と自己形成とは同義的に用いる。たとえば、必ずしも理想自己を志向するという目的的なものに限定されない形での自己形成のとりえ方に関して、山田(2003a, 2003b)などがある。

以上、理想自己の持つ自己形成的側面の検討に際する問題点から本研究では以下の目的を設定する。(1) 個性記述的観点から表出された理想自己を対象として、その実現に対して向かっていきたいとする意欲側面と実際に向かっているとする行為側面とからなる理想自己志向性を測定し、適応感を絡めた自己形成のタイプを作成する。(2) そして、意味づけの視点として理想自己の選択理由を、行為の内容的側面をもとらえるために具体的方略の有無ならびに方略の希求をたずね、それぞれの特徴記述について検討するとともに、自己形成のタイプの違いにみられる選択理由と具体的方略について検討することを目的とする。

研究方法

対象者 近畿圏内の大学生153名(男性61名、女性92名)。ただし回答に不備のみられるもの9名を除く144名(男性58名、女性86名)を対象とする。

調査時期 2001年11月

調査内容

1-1) 理想自己の抽出 「あなたが『自分はどうなりたい』と思う理想の自分のイメージを思い浮かべて下さい。その理想の自分について、良い悪いの判断をするわけではありませんので、あなた自身が思いつくままに以下の空欄(5個全て)に自由に記入して下さい。」という教示を与えた。

1-2) 最重要理想自己の選定および選択理由
以降の分析において、選定された理想自己を対象に扱っていくため理想自己の選定を行った(以降、「理想自己」という表記は「個人によって選定された最重要の理想自己」を指す)。教示は、「先にあげた5つの理想の中で、あなたが最も重要だと思う理想を1つ選んで、以下の空欄に記入して下さい。また、それを選んだ理由(“意味づけ”として統一)についても記入して下さい(最大3つまで)。さらに、その優先順位(1, 2, 3)をカッコ内に記入して下さい。」であった。選定理由に

関して以下の分析では、優先順位が1番目とされているものを対象とした。

2) 理想自己実現のための具体的方略 ここでは自らの理想自己に対して「その理想を実現するために、どうすればいいか具体的な方法を知っていますか」と問い、「はい、知っています」「いいえ、知りません」の2件法で回答を求めた。「はい」と答えたものには、a.それはどのような方法か記入を求め(最大5つまで)、b.その方法を実行していれば「実行」に、そうでなければ「非実行」に、○印をつけてもらった。「いいえ」と答えたものには、a.理想自己実現のための具体的な方法を知りたいか否かを、「はい、知りたいです」「いいえ、知りたくないです」の2件法で問い、b.「はい」と答えたものには、なぜそれを知りたいのか、「いいえ」と答えたものには、なぜそれを知りたくないのか、をそれぞれ自由記述で回答を求めた。

3) 理想自己に対する志向性 本研究では自らの理想自己の実現に対して、どの程度それを実現したいと思っているのか、そしてその実現に向けてどの程度行為を行っているのか、という2側面を測定するため、前者を理想自己に対する意欲、後者を行為と位置づけ、両者を理想自己志向性の下位概念として設定している。意欲の側面は、水間(2001)の自己形成意識尺度を参考に「○○の実現がたとえ困難なものだとしても、それに向かっていたいと思う」といった7項目を設定し、行為の側面は、「○○の実現に向けて着実に近づきつつある」といった4項目を設定した。ここでの項目は、個人が自ら表出した理想自己に対する志向性を測定することを目的としているため、○ ○という形で提示している(○ ○には自分が表出した理想自己を当てはめて回答するよう教示している)。それぞれ「非常にあてはまる」(5点)～「全くあてはまらない」(1点)までの5件法で評定を求めた。

4) 自尊感情尺度 Rosenberg(1965)のself-esteem scaleを星野(1970)が訳した自尊感情尺

度10項目を使用。それぞれ「あてはまる」(4点)～「あてはまらない」(1点)までの4件法で評定を求めた。

結 果

1. 各指標の基礎統計量

1) 理想自己に対する志向性 全11項目で因子分析(主因子法, Promax回転)を行ったところ, 固有値の落ち込みからも2因子で解釈が可能であった。ただし, 項目7(どうすれば〇〇を実現できるか考えている)が両因子に高い, 項目2(たとえ〇〇を実現できなくても, それはそれで仕方がない), 項目11(〇〇の実現のためなら, ある程度の犠牲は仕方がない)が両因子に低い負荷量を示したので, 当該項目を除外した。残った8項目で再度因子分析を行ったところ, 複数因子に高く負荷する, あるいは低く負荷する項目が見られないことから, 2因子解が妥当と判断された。当初設定した2因子と対応して, 第1因子を「理想自己に対する行為」の因子(4項目), 第2因子を「理想自己に対する意欲」の因子(4項目)とする。これをもって「理想自己志向性」とする(Table 1)。信頼性分析に関して, 第1因子 $\alpha = .843$, 第2因子 $\alpha = .732$ と比較的高い値が得られた。因子ごとの平均値(標準偏差)は, 第1因子が13.70(3.15), 第2因子が16.56(2.85)であった。なお, 因子間相関は.514であった。

2) 自尊感情尺度 自尊感情全10項目について, 主因子法による因子分析を行ったところ, 先行知見通り1次元性とみなすことが妥当と考えられた。なお, 信頼性は $\alpha = .830$ と高い値が得られ, 平均値(標準偏差)は26.30(5.38)であった。

2. 理想自己志向性と自尊感情の関連分析

ここでは, 本研究で設定された理想自己志向性の意欲と行為の2側面と自尊感情との関連分析(Pearsonの相関係数)を行った。その結果, 行為と自尊感情の間には有意な相関がみられ($r = .345, p < .001$), 意欲と自尊感情の間には

Table 1 理想自己志向性の因子分析結果(主因子法, Promax回転)

項目の内容	F1	F2
F1「理想自己に対する行為」の因子 ($\alpha = .843$)		
4. 〇〇の実現に向けて着実に近づきつつある。	.923	-.274
5. 〇〇の実現のために, 現在何か取り組んでいる。	.735	.078
10. 〇〇の実現のために, できる限りのことをしている。	.702	.158
1. 〇〇の実現に向かって努力している。	.618	.192
F2「理想自己に対する意欲」の因子 ($\alpha = .732$)		
6. 〇〇を実現できるかどうかは分からないが, できるだけのことをやってみようと思う。	-.208	.779
9. 〇〇の実現がたとえ困難なものだとしても, それに向かっていきたいと思う。	.038	.737
3. たとえ他の人に認められなくても, 〇〇の実現のために努力しようと思う。	.234	.495
8. * 〇〇はあくまでも理想であって, 特にそのために何かをするというようなことはない。	.134	.474

注. *は逆転項目を示す。

相関はみられなかった($r = -.014, n.s.$)。また, 意欲と行為との間には比較的高い相関関係がみられた($r = .493, p < .001$)。なお, より詳細に検討を行うため, 理想自己志向性の2変数それぞれを制御変数とした偏相関分析を行ったところ, 意欲を制御変数としたときの行為と自尊感情との関連には大きな変化はみられなかった($r = .405, p < .001$)。行為を制御変数としたときの意欲と自尊感情の間には有意な負の相関がみられた($r = -.225, p < .01$)。

3. 理想自己の内容によるカテゴライズ

まず, 選定された理想自己の内容がどのようなものであるかを示すために記述内容のカテゴライズを行った^{3-a)}。その際のカテゴリ化に関しては溝上(2001)を参考に, 上位次元-下位次元の

Table 2 表出された理想自己の内容に関するカテゴリー (N=144)

上位	下位	記述 (N)	記述例
自己	自己の特徴	性格 (22)	寛大(心の広い・器の大きい)/優しい/冷静(クール)/おもしろい/温厚(怒らない)
		能力 (5)	秀でた能力(人を引きつける能力・これだけは負けないもの)/自分の領域を広げていける能力
		知識 (2)	人間的にも知的にも賢い/専門的知識を身につける
		身体 (5)	キレイ(かわいい)/魅力のある/ファッションセンスがいい
		特技 (1)	テニスが強い
		性役割 (1)	女性としての奥ゆかしさを忘れない
	自己・世界への関わり方	自己確立 (13)	自分に自信を持つ/自分の意志(意見)を持っている/人に流されない(しんの通っている人)
		自立 (4)	(精神的に)自立している/親から独立
		行動 (4)	自分の感情に左右されずに冷静に行動できる/一度計画したら最後まで遣り通す
		熟考・柔軟性 (5)	物事を深くとらえる/頭が柔らかく、いろんな角度で物事をとらえる(発想が柔軟・頭の回転が早い)/独創的なアイデアをひねり出す
		成長意欲 (4)	常に目標を持っていて、それに向かって生きていて何事にも一生懸命(常に上を目指す)/目標を見失わない強い意志を持ち続ける
		ポジティブ思考 (2)	小さいことでよくよ悩んだり動揺しない/辛い事があっても落ち込まない
	価値観 (5)	自分の気持ちに正直/規律を守る(ウソはつかない・約束事は破らない)	
他者	人間関係	他者存在 (5)	信頼できる友達がたくさんいて誰とでも仲良く付き合える. 幅広い対人関係を持ち、数人の親友を持つ
		異性 (3)	好きな人から愛される/異性からチャホヤされる
		他者からの承認 (10)	人(友達・先輩・同姓・異性)から好かれる(親しまれる・慕われる・必要とされる・頼られる)
	対他者態度	対他者態度 (25)	思いやりのある(人の気持ちを考えられる・人の痛みの分かる)/社会的(誰とでも仲良くなれる/誰にでも平等(人をバカにしない)/人に優しい(親切・暖かい)
人生	将来	生き方 (17)	信念に基づいた生き方/正直な(素直な)生き方/自由な(気ままな)生き方/後悔しない(充実した)生き方/積極的に物事に取り組む生き方/楽しい事を自分で見つけられる生き方
		将来目標・展望 (9)	充実している(幸せな・後悔しない・死ぬ直前に笑えるような)人生/やりがいのある仕事をしながら結婚し、子どもを育てる(幸せな家庭を持つ)/夢をかなえたい(留学したい)
		職業 (2)	自分が楽しんでやれる仕事につく

2段階階層カテゴリー化を行った (Table 2). これは上位次元に視点の中心をおき、そこから下位

次元を作成するというものである. 上位次元カテゴリーには「自己」「他者」「人生」の3領域を設定

3-a~3-e) 記述内容のカテゴリ化に関しては、いずれも心理学を専攻とする大学院生2名により評定をもらい、分かりにくい内容については十分協議を行った結果、最終的にaでは94.6%, bでは95.4%, cでは97.1%, dでは94.0%, eでは93.1%の評定一致率を得た.

4) 上位次元は下位次元より抽象的であり、さまざまなレベルの自己をきわめて大局的に理解するために最低限必要とされるものであり、下位次元および記述カテゴリーの設定は、KJ法の結果と溝上(2001)の結果とを比較検討し行われた.

Table 3 理想自己に対する具体的方略の特徴的記述 (N=70)

反応形態	記述例
対自己態度 (内面)	「どうでもいい」とは考えない/自分がどうしたいかきちんと考える/自分への甘さを捨て厳しくなる/向上心を常にもつ/今の状態がもし自分に降りかかればと考える/自分の感情を後から振り返る/問題の核を常に見つめなおす/今の自分に満足しない/自分の世界に引きこもらない/自己分析を怠らない
対自己態度 (行動)	実践あるのみ/思いついたら行動/自分のやりたいことを見つけ励む/人にあまり頼らず自力で乗り越えていく/自分からやりたいことを探す/常に意識して行動し、その結果をフィードバックしていく/困難でも立ち向かう/多くの情報を収集・吸収する/知識・経験を増やす/落ち着いて行動する
対他者態度	他人を地位とかで判断しない/他人の気持ちを理解しようとする/自分がやられて嫌なことは人にははしない/相手の性格、事情、心境などを考える/周りの人も自分と同じくらい大切にす/普段から人の立場にたつて物事を考える/自分の主張の前にまず相手の主張を聞く/いろんな人の生き方を認める

し、下位次元カテゴリーには「自己の特徴」「自己・世界への関わり方」「人間関係」「対他者態度」「将来」の5領域を設定した⁴⁾。

4. 理想自己の意味づけによる検討

ここでは選定された理想自己の背景に存在する意味づけを抽出し、より深い次元での検討を行うため選択理由の記述を対象とした特徴的なタイプについて考察を行った。

大きくは6つに分かれ、1つめは“理想自己設定の意味づけに自らの自信やアイデンティティの確立を付与している”「1. 自信・アイデンティティ確立希求型 (N=27)」(それによって自分に自信を持つことが出来るから/色々なことにチャレンジし自分を探したいからなど)で、2つめは“対人関係をよりよいものにしたいという意味づけによって支えられている”「2. 対人関係向上型 (N=27)」(どんな環境下でも他人とうまくやるため/友達がたくさんできるからなど)で、3つめは“生きがいの希求を理想自己設定の意味づけとして付与している”「3. 生きがい希求型 (N=39)」(一度しかない人生だから幸せに過ごしたい/意味のある人生を送りたいからなど)で、4つめは“理想自己設定の背景に自らの価値信念を付随させている”「4. 価値反映型 (N=21)」(人間として基本であるから/それが正しいと思込んでいるからなど)で、5つめは“理想自己設定に自分に無いものやあこがれのようなものを付与している”「5. 現在とのズレとあこがれ型 (N=17)」(今

の自分に無いものだから/そのような人をいいと思うからなど)で、6つめは“理想自己設定の意味づけに深い意味付与がなされていない”「6. 単純反応と万能型 (N=13)」(おもしろいから/これがある人は他の理想もできる人のような気がするからなど)であった^{3-b)}。

5. 理想自己の具体的方略による検討

ここでは理想自己実現のための具体的方略について自由記述と評定を絡めて検討を行った。

手続きは、自らの最重要理想自己に対して、(a)それをどうすれば実現できるのかといった具体的な方略を知っているか否かを問い、知っていれば(b)それはどのようなものを自由記述により表出させ、(c)その実行の有無を2件法により評定を求めた。知らなければ(d)その方略を知りたいか否かを2件法により問い、(e)それぞれの理由(なぜそれを知りたいのか/なぜそれを知りたくないのか)を自由記述により表出させた。内訳は方略有り群(タイプ1)70名(48.6%)、方略無し/希求有り群(タイプ2)47名(32.6%)、方略無し/希求無し群(タイプ3)27名(18.8%)であった。

理想自己の具体的方略に関する内容分析

次に、上記3つのタイプごとにおける具体的方略の内容に関する分析を行った。

タイプ1：方略有り群 この群に相当する人数は70名で、記述は1個から最大5個まで任意に答えてもらった。記述数は175個、1人あたりの平

Table 4 理想自己に対する意欲と行為および適応感の高低による組み合わせのタイプとその特徴

タイプ	意欲	行為	自尊感情 (適応感)	N	タイプ名	特徴
1	H	H	H	25	適応的自己形成	適応感が高く、理想自己実現に対する意欲及び行為においても高い値を示している
2	H	H	L	30	不適応的自己形成	適応感は低い、理想自己実現に対する意欲及び行為において高い値を示している
3	H	L	H	6	適応的意欲型自己形成	適応感は高く、理想自己実現への意欲も高いが、行為において低い値を示している
4	H	L	L	19	不適応的意欲型自己形成	理想自己実現への意欲は高いものの、行為及び適応感において低い値を示している
5	L	H	H	17	適応的行為型自己形成	理想自己実現への意欲は低いものの、行為及び適応感において高い値を示している
6	L	H	L	5	不適応的行為型自己形成	理想自己実現に向けて行為は行っているが、意欲及び適応感が低い値を示している
7	L	L	H	17	適応的非自己形成	適応感は高いが、理想自己実現に対する意欲や行為には低い値を示している
8	L	L	L	25	不適応的非自己形成	適応感が低く、理想自己実現に対する意欲も行為も低い値を示している

均は2.5個であり、以下これに基づいて検討を行った。これらの記述の特徴は、大きく3つのタイプに分かれ (Table 3), 1つめは“理想自己の実現に向けて内面的なアプローチを示している”「對自己態度 (内面) (69個/39.4%)」に関する記述 (「どうでもいい」とは考えない/自分がどうしたいかきちんと考えるなど), 2つめは“理想自己の実現に向けて行動レベルでのアプローチを示している”「對自己態度 (行動) (73個/41.7%)」に関する記述 (おもしろそうだと思うからまず行動してみる/知識・経験などを増やすなど), 3つめは“理想自己実現のために他者に対する態度といった側面でのアプローチを示している”「対他者態度 (33個/18.9%)」(周りの人も自分と同じくらい大切にす/他人の気持ちを理解しようとするなど)であった^{3-c)}。

タイプ2: 方略無し/希求有り群 この群に相当する人数は47名 (記述数47個) で、以下これに基づいて検討を行った。これらの記述の特徴は、大きく3つに分けられ、1つめは“方略を知ることによって自らの理想自己実現に迫りたいと

いった接近的・自己向上的反応を示している”「接近・向上反応 (N=25)」(その理想に近づくために努力したいから/実現すれば自分がより向上できると思うからなど), 2つめは“このままではいけないといった現状回避的な反応を示している”「現状回避反応 (N=8)」(このままだと何も得られないから/理想を見失うからなど), 3つめは“深い意味付与がなされていない”「単純反応 (N=14)」(そうなりたいから/理想としているからなど)であった^{3-d)}。

タイプ3: 方略無し/希求無し群 この群に相当する人数は27名 (記述数27個) で、以下これに基づいて検討を行った。これらの記述の特徴は、大きく2つのタイプに分けられ、1つめは“希求を否定するのは自らがそれを探して行きたいからといった積極的理由を付与している”「積極的否定反応 (N=14)」(方法は自分で見つけたいから/自然にしていって身につけていくのが理想的だからなど), 2つめは“希求ということに対して否定的意味づけを行っている”「否定的反応 (N=13)」(方法なんてないと思う/人それぞれ

Table 5 各タイプにおける意味づけを機軸とした分析

タイプ (N)		意味づけのタイプ					
		1	2	3	4	5	6
1 (25)	N	5	2	10	3	2	3
	タイプ内%	20.0	8.0	40.0	12.0	8.0	12.0
	意味内%	18.5	7.4	25.6	14.3	11.8	23.1
2 (30)	N	7	2	12	6	3	-
	タイプ内%	23.3	6.7	40.0	20.0	10.0	-
	意味内%	25.9	7.4	30.8	28.6	17.6	-
3 (6)	N	2	1	2	-	-	1
	タイプ内%	33.3	16.7	33.3	-	-	16.7
	意味内%	7.4	3.7	5.1	-	-	7.7
4 (19)	N	4	5	3	4	2	1
	タイプ内%	21.0	26.3	15.8	21.0	10.5	5.3
	意味内%	14.8	18.5	7.7	19.0	11.8	7.7
5 (17)	N	5	2	4	5	-	1
	タイプ内%	29.4	11.8	23.5	29.4	-	5.9
	意味内%	18.5	7.4	10.3	23.8	-	7.7
6 (5)	N	2	1	2	-	-	-
	タイプ内%	40.0	20.0	40.0	-	-	-
	意味内%	7.4	3.7	5.1	-	-	-
7 (17)	N	1	4	2	3	3	4
	タイプ内%	5.9	23.5	11.8	17.6	17.6	23.5
	意味内%	3.7	14.8	5.1	14.3	17.6	30.8
8 (25)	N	1	10	4	-	7	3
	タイプ内%	4.0	40.0	16.0	-	28.0	12.0
	意味内%	3.7	37.0	10.3	-	41.2	23.1

だと思ふからなど)であった^{3-e)}。

6. 理想自己から捉えた自己形成に関する検討

自己形成のタイプ分類

ここでは、理想自己志向性の2変数（意欲と行為）から自己形成のタイプを作成する⁵⁾。その際、自尊感情（適応感）の指標も絡め、「適応感を絡めた自己形成のタイプ（以下、自己形成のタイプと表記）」を作成し、それぞれのタイプにみられる理想自己に対する意味づけおよび具体的方略に関する検討を行った。具体的にはそれぞれの得点の平均値（意欲13.70、行為16.56、自尊感情26.30）を基準に高低に分割し、2×2×2の8タイプを作成した（Table 4）。

自己形成のタイプと意味づけとの関連

ここでは、先に設定した自己形成のタイプと理想自己に付与された意味づけのタイプの関連について検討を行った⁶⁾（Table 5）。その際、自己形成のタイプ内および意味づけのタイプ内いずれにおいても20%以上の値が得られたセルに着目した。

まず、(1)最も適応的とされるタイプ1の適応的自己形成群においては、理想自己設定の意味づけに生きがいを希求するものが多くみられ（タイプ内40.0%、意味づけ内25.6%）、(2)タイプ2の不適応的自己形成群においても同様の傾向がみられたが（タイプ内40.0%、意味づけ内30.8%）、このタイプはそれに加え、自信やアイデンティティの確立を希求するもの（タイプ内23.3%、意味づけ内25.9%）や価値を反映しているものも比較的多くみられた（タイプ内20.0%、意味づけ内28.6%）。そして(3)タイプ5の適応的の行為型自己形成群においては、価値反映型のものが多くみられ（タイプ内29.4%、意味づけ内23.8%）、(4)タイプ7の適応的非自己形成群においては、単純反応と万能型をあげるものが多くみられた（タイプ内23.5%、意味づけ内30.8%）。また、(5)タイプ8の不適応的非自己形成群においては、理想自己に対する意味づけに対人関係向上型（タイプ内40.0%、意味づけ内37.0%）および現在とのズレ・あこがれ型をあげているものが多くみられた（タイプ内28.0%、意味づけ内41.2%）。

5) タイプ分けに際して、理想自己志向性内の意欲と行為との間に中程度の相関関係がみられていたが、尺度および項目の性質上ある程度の相関関係がみられることは不可避的である。よってこのような関係があるものの、意欲と行為との高低のバランスを検討することの意義を優先してタイプ分けを行った。
6) その際、個人によって選定された理想自己の内容に関しては分析対象外とする。その理由として、表出される内容そのものが問題ではなく（相対的価値・重要性の問題ではない）、重要な問題は、その個人によって選出された理想自己に対してどのような意味づけがなされているかといった次元（主観的意味づけ）にあるからである（cf.水間, 2001）。

Table 6 各タイプにおける具体的方略を機軸とした分析

タイプ (N)	方略	N=	方略内 (%)	タイプ内 (%)	実行数/方略数 (%/1人)	反応形態/1人		
						1	2	3
1 (25)	1	19	27.1	76.0	2.2/2.6 (86.0)	0.9	1.1	0.2
	2	4	8.5	16.0	-			
	3	2	7.4	8.0	-			
2 (30)	1	17	24.3	56.7	1.5/2.4 (61.9)	0.4	0.4	0.7
	2	8	17.0	26.7	-			
	3	5	18.5	16.7	-			
3 (6)	1	2	2.9	33.3	1.0/3.0 (33.3)	0.5	-	0.5
	2	2	4.3	33.3	-			
	3	2	7.4	33.3	-			
4 (19)	1	8	11.4	42.1	1.3/2.6 (52.4)	0.8	0.5	-
	2	9	19.1	47.4	-			
	3	2	7.4	10.5	-			
5 (17)	1	12	17.1	70.6	1.8/2.4 (75.9)	0.6	0.6	0.5
	2	2	4.3	11.8	-			
	3	3	11.1	17.6	-			
6 (5)	1	2	2.9	40.0	1.0/2.5 (40.0)	-	1.0	-
	2	3	6.4	60.0	-			
	3	0	0.0	0.0	-			
7 (17)	1	5	7.1	29.4	1.6/2.4 (66.7)	1.0	0.2	0.4
	2	7	14.9	41.2	-			
	3	5	18.5	29.4	-			
8 (25)	1	5	7.1	20.0	1.2/2.0 (60.0)	0.2	0.8	0.2
	2	12	25.5	48.0	-			
	3	8	29.6	32.0	-			

注. 反応形態は「1. 対自己態度 (内面)」 「2. 対自己態度 (行動)」 「3. 対他者態度」を示し、数値は実行された方略の数を示している。

自己形成のタイプと具体的方略との関連

ここでは、先に設定した自己形成のタイプと理想自己実現に対する具体的方略およびその希求との関連について検討を行った (Table 6)。まず、(1) タイプ1の適応的自己形成群は、具体的方略を有しているものが多く (タイプ内76.0%, 方略内27.1%), その方略の実行率も高い (86.0%)。また、その方略も内的・外的問わず自己に対する態度をあげるものが多くみられた (合わせて90.7%)。 (2) タイプ2の不適応的自己形成群は、実行率はさほど高くなく (61.9%), 方略は他者

に対する態度をあげているものが多くみられた (46.2%)。 (3) タイプ4の不適応的意欲型は、方略の保有率はさほど高くないが (タイプ内42.1%, 方略内11.4%), それを希求しているものが多く (タイプ内47.4%, 方略内19.1%), またその理由も「接近・向上反応」が多くみられた (77.8%)。 (4) タイプ5の適応的行為型自己形成群では、タイプ1と同様に、方略を有しているものが多く (タイプ内70.6%, 方略内17.1%), 高い実行率がみられた (75.9%)。 (5) タイプ7の適応的非自己形成群およびタイプ8の不適応的非自己形成群では、方略を有していないものが多くみられた (合わせてタイプ内80.0%, 方略内55.1%)。さらに (6) タイプ8は、方略を希求しているものが多くみられた (タイプ内48.0%, 方略内25.5%)。

考 察

理想自己志向性と自尊感情の関連分析

各指標の関連分析に関して、意欲と行為、行為と自尊感情とに相関関係が認められたが、意欲と自尊感情の間には相関関係はみられなかった。意欲と行為いずれも自らの掲げる理想自己実現に対しての志向性 (肯定的側面) というところから、両者の相関関係については容易に想像され、また行為と自尊感情との関連についても納得のいく結果であると言えよう。しかし、意欲と自尊感情との間に相関関係がみられなかったのはなぜだろうか。さらに詳細な検討を行うため、行為の影響を外した意欲と自尊感情の偏相関を出したところ有意な負の相関がみられた。この結果は、理想自己実現への意欲が高い場合自尊感情は低いことを示している。これは、本研究では個人にとって重要な理想自己であるというところを出発点にして

いる。そのため自尊感情の低い人ほどその実現に対してより切実感を持っており、それが意欲の高さと結びついているものと思われる。それが行為という側面と合わさることで（影響を受けることで）、結果的に相関がみられなかったのではないかと思われる。意欲というものはその性質上、認知的なものに限定されるが、行為というものはある程度実際の（外的）な側面を含むため、行為側面の評価に関しては自尊感情の高さが伴うと考えられる。したがってこの結果については今後の詳細な検討の必要はあるものの、それなりに妥当な結果だとも言える。

理想自己の内容、意味づけ、方略の個別的検討

「理想自己の内容」に関して（Table 2）、表出率の高かった記述カテゴリーは、順に「対他者態度（17.4%）」「性格（15.3%）」「生き方（11.8%）」「自己確立（9.0%）」「他者からの承認（6.9%）」であった。山本・松井・山成（1982）では、性差を問わず現代大学生が自己を意識する時に重要とする3側面に「優しさ（性格）」と「生き方」をあげている。また水間（2001）では、理想自己の内容に関するカテゴリーを通して、度数の多かったカテゴリー順に「対他者態度」「行動傾向・性格特性」「自己の確立」「他者からの支持」をあげており、本研究で得られた理想自己の記述カテゴリーはこうした知見と一致するものであった。「自己確立」の問題は青年期の発達課題として古くから言われてきているものであり（cf. Erikson, 1959）、「生き方」の問題も青年にとって重要な問題である（溝上, 1995）。そして、特に「他者」に関しての理想をあげているものの割合が全体の約4分の1と高く、対人関係が希薄化してきているといわれる現代にありながらも、理想としては他者という存在を重視しているということが伺われる。溝上（2001）は、大学生の自己評価を規定する要因としての他者要因の出現率の多さを示しており、また、小平（2000）においても、大学生の理想自己としての他者との関係性の重要性につ

て指摘している。

「理想自己の意味づけ」に関して、6つのタイプが得られた。ここでは個人にとって重要とされる理想自己に対して“なぜ（Why）”という切り口で、更に理想自己に対する意味づけを抽出しようとするものである。この視点は溝上（1995）のWHY答法とも通ずる所があり、これにより更に深い次元での個人の理解が可能となる。概念は文脈を抜きに扱えない（溝上, 1999）という指摘にもあるように、個人によって表出される理想自己という概念それ自体が重要なのではなく、それに付与された意味づけがいかなるものであるのかが重要である。本研究において、理想自己の内容レベルでは同様のカテゴリーに属するものでも意味づけの分類を比較すると異なる意味づけを行っているものが少なからずみられた。たとえば、「能力」に関する理想を掲げているものの意味づけをみると、能力に関する理想を実現することで“自分に自信をもつことができる（自信・アイデンティティ確立希求型）”“生きるのに有利（価値反映型）”“魅力がないと人は寄ってこない（対人関係向上型）”といった異なる意味づけが行われているのである⁷⁾。

「理想自己実現に対する具体的方略」に関して、本研究では具体的な方略を知っているか否かという次元で分けたいが、その方略を知りたいか否かという次元でも問うている。前者の視点のみで問うと、知りたくても分からないという人、別に知らなくてもいいという人などがどちらも「知らない」という選択肢に混在してしまうのである。こうした問題を避け、青年にとっての「知らない」ことの意味をより深く知るためにこのような2段

7) 本論文では取り上げていないが、表出された理想自己（概念レベル）のカテゴリーによる理想自己志向性得点には統計的な差がみられなかったが、理想自己の選択理由（意味づけのレベル）のカテゴリーにおいてはいくつかの統計的な有意差がみられている。このことにより、できる限り個人差をふまえて統計的にも意味のある差を出しうることが部分的にはあるが示せたと言えよう。

階の設定をし、さらにその理由を問うたのである。そうして得られたタイプ2の記述をみると、特に接近・向上反応（たとえば、理想を実現するために必要なことなら何でもしようと思うから）においては非常に強い理想実現への意欲を感じることができる。そして、このタイプ2は47名と32.6%存在し、現代大学生の中にもこのようなタイプが多く存在することが考えられ、個別に検討していくことが望まれる。同様の視点は尾崎（2001）においてもみられ、ここでは大学生の将来の見通しというテーマで、見通しの有無に、見通しの希求の有無という視点を加え、大学生における将来の見通しを持つことに対する意味づけの違いを指摘している。

理想自己から捉えた自己形成に関する検討

Table 4～6では、理想自己実現に対する志向性を構成する意欲と行為の2側面と適応感を示す自尊感情との高低から作成した自己形成の8つのタイプにおける理想自己の意味づけと具体的方略に関する検討を行った。

その結果、適応的自己形成群（タイプ1）は、理想自己が生きがいの希求によって支えられ、その理想実現のための方略を有しており、特に自己に対する内面的・外面的アプローチを実行しているということ、不適応的自己形成群（タイプ2）は、同様に主として生きがいの希求（次いで自信・アイデンティティ希求、価値反映に関しても高い）によって支えられており、実現のための方略も有しているが、実行率は低く、他者に対するアプローチを実行しているものが多いことが示された。タイプ1とタイプ2では同じ自己形成の高さがみられるものの、適応感が異なることに関して、方略実行率の高さが関係していることが考えられる。適応的行為型自己形成（タイプ5）では、タイプ1との類似傾向（方略保有率が高く、実行率も高い）がみられたが、一考察の域を出るものではないものの、意欲が低いということは、そもそもの理想自己設定の段階である程度距離的に現

実自己に近い状態にあるのではないだろうか。特に実現したいという意欲はないがやっているかといえやっていると答える。このような点（現実自己との距離の問題）がみられることから、本研究では扱わなかった理想自己と現実自己のズレの視点を入れて検討することが有効な手段の一つかもしれない。また、適応的非自己形成群（タイプ7）および不適応的非自己形成群（タイプ8）は、いずれも方略を有している率が低いが、タイプ7は理想自己の設定に単純な願望を付与しているものの率が高く、タイプ8は理想自己の意味づけに対人関係を向上させたいといった願望や現在とのズレを埋めたいあるいはあこがれを抱いているといった感情を付与しているものの率が高かった。これは、先のタイプ5とは逆で、タイプ7において意欲・行為ともに低いものの適応感が高いのは、理想自己の選択理由に願望といった意味づけを付与しているものが多いということから、現実自己との距離が遠い、つまり叶わないだろうといったレベルの理想自己を設定している可能性が考えられる。そして、タイプ8では、理想自己の選択理由の主要なものとして、対人関係を向上させたいといった日々直面しているような意味づけをしているということから、結果としてこのような差異がみられたのではないだろうか。

ここでは、理想自己に対する志向性をその実現に対する意欲と行為といった視点から捉え、それを自己形成として適応感を絡めパターン化して、それらにみられる理想自己に対する意味づけならびに実現に対する具体的方略（方略の有無/実行率/方略のタイプ/方略の希求）の様相（異同）について検討を行った。意味づけの点（Table 5）から、(1)（本研究の文脈において）自己形成的（理想自己志向的）であるものは、自らの理想自己に対して自信・アイデンティティや生きがいの希求、価値反映といった「自己」や「人生」（自己の問題）に関連した意味づけが行われやすいということ、(2) 非自己形成的であるものは、対人関係

の向上やあこがれといった「他者」（他者の問題）に関する意味づけが行われやすいということが示された。これは、「他者」という自分だけの問題ではどうにもできないような問題であるだけに、意欲や行為といった側面に対し低い認知的評価が行われたものと思われる。

次に、具体的方略の点（Table 6）から、（1）自己形成的であるものは、具体的方略を有しており、さらに適応的であるものは実行率も高く、自己に対する方略をとりやすいということ、（2）非自己形成的なものは、具体的方略を有しておらず、さらに不適応的であるものは方略を希求する傾向が高いということが示された。これより、理想自己志向性および自尊感情といった視点から自己形成を捉える際に、「具体的方略」（方略の有無や希求の有無、方略内容や実行の有無も含む）といった視点を考慮することの重要性が示唆された。

青年期以降は、自分自身の掲げる理想像をめざしての主体的な自己形成の比重が大きくなる（榎本, 1999）という指摘や自己形成を考えていく上で理想自己や個人的目標は非常に興味深いトピックである（水間, 2002a）との指摘にもあるように、本研究では大学生の「自己形成」を捉えるための枠組みとして「理想自己」という自己像に着目した。具体的には、理想自己に対する「内容」「意味づけ」「意欲」「方略」「行為」といった視点から検討を行った。未来への自己像としての理想自己の多様な側面（単なる認知的評価の集合ではなく）を組み込んだ本研究は、大学生の自己形成という現象に果たす理想自己の役割に関する新たな見方（視点）の提示として、認識論的・方法論的な問題に対するいわば“たたき台”として位置づけられる。

今後の課題

今後の課題として、より立体的な理想自己の自己形成に果たす役割について検討するために、a. “ズレ”という視点/指標の再考・導入すること、

b. “自己の発達段階”という視点/指標を導入すること、c. 類似概念でありながらも研究間の交流が必ずしも図られていない“目標研究”における視点/指標を導入することなどが考えられる。また、異なる視点として、本研究では理想自己を記述させることを前提としているが、その個人全体（全体性の考慮）にとって日常のなかで理想自己というものがどの程度どのような意味づけ・状況下でどのように機能しているのかを検討していくこと（最初に理想自己ありきの考え方・方法論ではない）があげられる。理想自己設定の問題は、水間（2002b）においてもその重要性が指摘されているところである。

謝辞

本論文の作成にあたり、大阪教育大学の秋葉英則教授、白井利明教授にご指導、ご助言を賜りました。心より御礼申し上げます。また、本論文の査読に当たって下さった諸先生方からはこのプロセスの中で多くの示唆に富んだご指摘を頂きました。厚く感謝申し上げます。

引用文献

- 安達喜美子・菅宮正裕 2000 自己像と自尊感情および自己成長意欲との関連について — 理想自己をとらえる際の新たな観点を加えて 茨城大学教育学部紀要（教育科学）, **491**, 43-155.
- Emmons, R.A. 1986 Personal strivings : An approach to personality and subjective well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, **51**, 1058-1068.
- 遠藤由美 1991 理想自己に関する最近の研究動向上越教育大学研究紀要, **10**, 19-36.
- 遠藤由美 1992a 自己評価基準としての負の理想自己 心理学研究, **63**, 214-217.
- 遠藤由美 1992b 自己認知と自己評価の関係 — 重みづけをした理想自己と現実自己の差異スコアからの検討 教育心理学研究, **40**, 157-163.
- 榎本博明 1999 <私>の心理学的探求 — 物語としての自己の視点から 有斐閣選書
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton.
- Higgins, E.T. 1987 Self-discrepancy : A theory relating

- self and affect. *Psychological Review*, **94**, 319-340.
- Hoge, D.R., & McCarthy, J.D. 1983 Issues of validity and reliability in the use of real-ideal discrepancy scores to measure self-regard. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 1048-1055.
- 星野 命 1970 感情の心理と教育 (2) 児童心理, **24**, 1445-1477.
- 梶田叡一 1988 自己意識の心理学 [第2版] 東京大学出版会
- 小平英志 2000 日本人にとって理想自己と義務自己はどのように異なる自己なのか — 大学生が記述する属性語とカテゴリーの分析を通して 性格心理学研究, **8**, 113-124.
- 桑原知子 1986 人格の二面性測定の試み — NEG-ATIVE語を加えて 教育心理学研究, **34**, 31-38.
- Little, B.R. 1983 Personal projects : A rationale and method of investigation. *Environment and Behavior*, **15**, 273-309.
- Markus, H., & Nurius, P. 1986 Possible selves. *American Psychologist*, **41**, 954-969.
- 溝上慎一 1995 WHY答法による将来の生き方基底因 心理学研究, **66**, 367-372.
- 溝上慎一 1999 自己の基礎理論 — 実証的心理学のパラダイム 金子書房
- 溝上慎一 2001 大学生の適応と自己の世界 — 自己評価とそれを規定する自己 溝上慎一 (編) 大学生の自己と生き方 — 大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 ナカニシヤ出版 Pp.19-49.
- 水間玲子 1998 理想自己と自己評価および自己形成意識の関連について 教育心理学研究, **46**, 131-141.
- 水間玲子 2001 自己形成意識の構造について — 否定的感情と理想自己の役割から 京都大学大学院教育学研究科博士論文 (未公開)
- 水間玲子 2002a 自己形成過程に関する研究の概観と今後の課題 — 個人の主体性の問題 京都大学大学院教育学研究科紀要, **48**, 429-441.
- 水間玲子 2002b 理想自己を志向することの意味 — その肯定性と否定性について 青年心理学研究, **14**, 21-39.
- Moretti, M.M., & Higgins, E.T. 1990 Relating self-discrepancy to self-esteem : The contribution of discrepancy beyond actual-self ratings. *Journal of Experimental Social Psychology*, **26**, 108-123.
- Ogilvie, D.M. 1987 The undesired self: A neglected variables in personality research. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 379-385.
- 尾崎仁美 2001 大学生の将来の見通しと適応との関連 溝上慎一 (編) 大学生の自己と生き方 — 大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学 ナカニシヤ出版 Pp.167-198.
- Rogers, C.R. 1959 A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships, as developed in the client-centered framework. In S.Koch(Ed.), *Psychology: A study of a science, Vol.3. formulation of the social context*. New York: McGraw-Hill. Pp.184-256.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 山田剛史 2002 理想 — 現実自己不一致における適応的・自己形成的側面に関する研究 神戸大学発達・臨床心理学研究, **2**, 23-37.
- 山田剛史 2003a 大学生における自己形成に関する研究 (I) — 全体性から抽出された活動内容と認知的評価およびその文脈からの検討 日本発達心理学会第14回大会発表論文集, **46**.
- 山田剛史 2003b 青年期の自己形成に関する研究の概観と展望 — 現象 (リアリティ) 理解のためのトライアングレーション 人間科学研究 (神戸大学), **11** (1), 165-177.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, **30**, 64-68.

— 2003. 2. 10. 受稿, 2004. 1. 25. 受理—

Tsuyoshi Yamada (Graduate School of Cultural Studies and Human Science, Kobe University). *Self-development of college students in terms of ideal self*. THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2004, Vol.12 No.2, 59-72.

The purpose of this study was to understand self-development of present-day college undergraduates in terms of ideal self. We used both rating scales and open-ended questionnaires in the study, and combined responses to them for the purpose. Orientation to self-development in the study was defined as the sum of eagerness to realize ideal self and actual movement toward it. Self-esteem score was used as an index of subjective adaptation, and along with the two orientation subscores, eight groups of students in different patterns of self-development were formed. Also, six categories of reasons for selecting the person's own ideal self were identified. We then examined their relationships with specific strategies used and level of motivation toward ideal-self realization. Results indicated that whether the reasons for ideal self selection involved self or others, the person knew specific strategies or not, and degree of their implementation, influenced the level of self-development orientation.

Key words: college students, self-development, orientation toward ideal self, reasons for ideal self selection, specific strategy